



~14  
4427



219



支那銀行組

三才

特 4427



□ 家の裏で盛んうちのうしろでさかは笑わら声こゑがして居る。筆ふでが  
 進すすまずいあつでジリじりと痛いた痒かゆのあつさつさつと居ゐる。筆ふでが  
 報はつしんしんで立た上あつた。それは洋やうししのあつさつさつと居ゐる。筆ふでが  
 脳のうを休やすめる。さあのあつさつさつと居ゐる。筆ふでが  
 時ときがありない。  
 □ 其その所ところへいくこと思ふこと  
 房州ぼうしゅうのあつさつさつと居ゐる。筆ふでが  
 大女おほんなのあつさつさつと居ゐる。筆ふでが

白雲の空へ  
 友へ  
 見水陰

昭和十年  
 五月二十九日  
 購求

ワザ組行

へ14 特  
4427

□ 家の裏で盛んは笑音がして居る。筆が  
進すまゝでジリジリと汗の蒸つて居る。比  
■ 家内の者だつたらぬ。比  
報しんで立上つた。それは併し  
脳を休めなす。どの道札の  
時ぞありぬ。  
□ 其所へいきて思ふこと  
房州  
大女の位

放

兎の家へ来朋  
自  
江見水陸

昭和十年  
五月二十九日  
購求



注意  
會話の  
無しの事

代木野さん、涎垂ると見るとんがや  
ア有りせんよと女中の作は漸く笑ひ  
を止めて、言掛けれ。  
可憐いやらさ。いひここ。誰  
見れそ、涎は垂らす。いひここ。と  
代木野は赤ら笑つて居る。  
顔は仕方では見えなけれど、代木  
野が笑へば何時でも涎が垂れるの  
が、思ふその縁の魚が想像で浮んで  
来る。

今日はお珍しく天気が好いので一月の  
ぬ。女温知の日の光を気分三人は  
か、声を揃へて笑つて居る。  
事件は新刊本の小巻の巻く  
居る。此方からは三人の  
体と井戸側とを隠して見えなく。  
小巻の巻は

刺を破る  
見え居る  
全部は  
名のみ  
久松

四 びつと、日本野らん、らんは知見するん  
がやア有りせんよ。早く早ヤ集へ入るッし

やいふ

四 あま、おあびつて嬉しびつと見てるがやア

あか。いさこころ。又始めれせ。らびこころ

四 あま、馬無志！本鏡は小憎ら〜ん

四 高生てん紗は仕ようがぬえあア

四 二人は笑りあがて、車りよ小屋の文を破り

ひんを居る。

四 自分はまわの事か起つて居るよか

あかつれ。

四 磨屋の老翁は砥石へ水を垂る〜あが

ふ。

四 この矢とぬはね、年々四度らんふ

事〜とぬ、二度子を産むん抱てえすす

かぬ、それがやア世と多過ぎますア。えへこ

こころと説明れ。

四 へえ然〜一匹は何匹位産あゆと代あ

野は矢通し成る〜了外間を聞きし〜

四 一匹は産みけ〜と老翁変通して話〜

左様ですぬ〜ある矢は何羽と輸入るん〜

可 此で一寸お便が張ります  
 可 何んぞ二羽で三百五十両か  
 可 三ツ、三百五十両と  
 可 嘘よ、何ぞん、此方は  
 可 此の女優さんのね、香津子さんか  
 可 お世帯のあたりの、作は  
 可 へえ、女優さん？、女役者で  
 可 へえ、女優さん？、女役者で

可 六羽... 無闇に振へるもんか  
 可 私達の着いた頃、先や  
 可 馬鹿の流石つれもんね、上等の  
 可 と却と高價で取引を  
 可 佐藤高橋お傳の刑罪  
 可 言ふ人は何かぬ  
 可 左様さ、然る悪くも  
 可 此の...  
 可 此の...



は言直れ

□ 小沢の者といふのが少し代り替はる

入るぬきで

□ 当時流らつたもの女優さん

訂正

□ 何んがって俺の知ははるんさ

□ 文芸者

と世間

□ 小倉山もあつた

□ それが先を飼つて居る

剃刀を磨ぐ。その時、**雛**の着且那が来

て迄を穿らす。房州の女中が、**祥**掛で

居る問題は、高橋の傳も、**女**役者

と出る。

□ 世所はエプロンも無い。西洋剃刀も無い。

新しがるの氣は、**是**が吾が

のホコリである。いやゴミの知れぬ

のであつた。

□ 自分には所の空気を、**世**傳して、**密**と

して置きたくと思つて、**声**も掛ける。茶

現代劇の

の間へと戻つた。

日 ぐら、あふ、山と 依の音が又頼む。

みず、何をか、又見せしめ、あふ、いひこ

日 あは、山と 却々熱い、いひこ

山と 代本野は、笑ひ、續け、間、山と

日 えへ、山と 磨る、上、山と

山と 居る。

然、自分、手張、し、白

火は一番、ツレの、白

白又キ、え、え

志争の、夏、肺火

の、味で、宿、居、果、い、感、熱、い

日、酔、く、弱、く、女、回、復、の、如、く、入、つ、て

日、優、の、浦、戸、香、津、子、が、見、舞、下、あ、て、居、る

病、床、の、申、居、し、の、ぎ、ま、小、火、を

二、匹、馬、の、中、へ、入、り、て、持、つ、て、来、る

二、匹、馬、の、中、へ、入、り、て、持、つ、て、来、る、有、合、せ、ん、の、は、入、り、て、来、る

二、匹、馬、の、中、へ、入、り、て、持、つ、て、来、る、有、合、せ、ん、の、は、入、り、て、来、る

火は鳥で

77

文



息は

急性

肺火

赤いれと知れ<sup>た時</sup>、<sup>香津</sup>、<sup>自分</sup>で<sup>先策</sup>  
 を膝の上へ引上げて、仕置<sup>打</sup>れうとせぬ<sup>間</sup>  
 二匹<sup>の</sup>平氣<sup>を</sup>、い<sup>や</sup>う<sup>ろ</sup>女膝<sup>の上</sup>へ乗<sup>り</sup>  
 せむれ<sup>り</sup>を喜<sup>んで</sup>、<sup>香津</sup>、<sup>自分</sup>で<sup>先策</sup>  
 指<sup>を</sup>鼻<sup>め</sup>とせ<sup>ぬ</sup>れ。一匹は指<sup>環</sup>、大<sup>顆</sup>真<sup>珠</sup>  
 を咬<sup>ら</sup>うとせ<sup>ぬ</sup>れ。その<sup>様</sup>が非<sup>常</sup>な詩<sup>的</sup>な  
 感<sup>じ</sup>をも<sup>れ</sup>ぬのを、<sup>今</sup>も<sup>女</sup>傳<sup>規</sup>の<sup>底</sup>に<sup>納</sup>め  
 て<sup>ある</sup>。

□其<sup>時</sup>の<sup>小</sup>矢<sup>は</sup>、<sup>中</sup>の<sup>今</sup>、一<sup>匹</sup>、<sup>鳥</sup>の<sup>経</sup>の

其<sup>長</sup>の<sup>目</sup>を<sup>垂</sup>れ<sup>し</sup>、<sup>ヤ</sup>と<sup>立</sup>て<sup>ば</sup>、又<sup>垂</sup>る<sup>る</sup>  
 下<sup>知</sup>、<sup>何</sup>ん<sup>と</sup>云<sup>へ</sup>ぬ<sup>愛</sup>嬌<sup>を</sup>あ<sup>り</sup>け<sup>れ</sup>。  
 □その<sup>馬</sup>の<sup>外</sup>箱<sup>か</sup>ら<sup>出</sup>る<sup>た</sup>を<sup>確</sup>と<sup>申</sup>す<sup>を</sup>  
 後<sup>の</sup>は<sup>机</sup>の<sup>上</sup>に<sup>置</sup>上<sup>つ</sup>て、短<sup>い</sup>尻<sup>尾</sup>を  
 石<sup>子</sup>の<sup>海</sup>に<sup>滑</sup>り<sup>て</sup>、黒<sup>く</sup>し<sup>り</sup>。縁<sup>側</sup>の  
 端<sup>は</sup>、<sup>病</sup>人<sup>の</sup>  
 胸<sup>の</sup>上<sup>へ</sup>乗<sup>つ</sup>て、首<sup>止</sup>を<sup>立</sup>て<sup>足</sup>なり<sup>様</sup>の<sup>愛</sup>  
 嬌<sup>を</sup>流<sup>し</sup>て<sup>居</sup>る<sup>間</sup>、彼<sup>方</sup>より<sup>い</sup>ち<sup>方</sup>より<sup>い</sup>  
 藥<sup>が</sup>コロ<sup>く</sup>轉<sup>ぶ</sup>て<sup>出</sup>て<sup>来</sup>る<sup>を</sup>、袖<sup>め</sup>て<sup>畫</sup>き<sup>し</sup>て  
 漫<sup>山</sup>

中へ入るゝでは無く。

□ け間をばは玄洞内へ伏籠り入らて観つて

置いたが、それぞ

成つたのを、自分の家の二階

捨て、大倉蔵で火の小屋を、表の井戸端の

日暮りのねいれへ新築せられ。

□ 世所へ移せられ、二匹は大喜び。

跳びを麻ねを居れば、既う我

は社といふ事を自覚して、毎

どるまを

居る

□ ぬ程斯う成ると小憎

□ あの小さなツレの、あの鳥籠

も、あんなの、これの上に乗つたの

分の胸を無つたの、女の

膝の上で指環の玉を、

□ い女併し、彼の時の、月日

自然を、

小矢と思つて居れば、自分の

ぎぬのであつた。

三) 自又し

流を動かすわけに  
 限して居る。  
 □ のどろろと、  
 自然は観察して居る。  
 □ 其中で一番  
 兎の動が多くの  
 筋力  
 の強い理由が  
 兎の優る性分が香  
 厚 ● さんのそれと一致して居るからである。  
 □ 自然は判じて居る。  
 □ 柔らかなる血の  
 鳴くで思ふ。それは既  
 り兎の柔和な動は澤山は血の  
 猫  
 や犬や猿とは能程  
 勝手な居る。

□ お香津 さんの  
 内、兎の  
 親 ● や兄弟 ● や  
 兎が澤山は居る。それはお香津  
 さんが兎  
 が好きだからである。  
 □ 兎の優る大に居る。猿の居る  
 動物が全  
 体の好きだからである。最  
 一ツ立入つて見ると非  
 常に愛する居る。自分  
 一ツ高い知  
 り居る。然して男が女  
 まで區別なく愛し  
 たいといふ性分がある。  
 □ 兎が、そんなち膽  
 正さる自誤解さん  
 易い強  
 女優の身分として、世  
 は餘程考へて居る。

□ おく〜の迫り（連）鳴き音を流す  
 れ音が無い。その為、不平〜の表情も  
 見せれ音が無い。他の動物も向して反抗  
 れ音が無い。大概ふきは眠り思ひで居る。  
 □ 虫所が能く香津さん下似て居る。矢は香  
 津子。の表徴と見て高当である。  
 □ え付 大森の海苔問答の神である。  
 家業は不向の兄の代は成る都合で  
 今では芝の櫻川町は 母親と姉一人妹二人  
 弟二人  
 女中二人、車夫一人と云ふ古き家筋で  
 □ 古川〜此絶えずで、大森の後がけは、決  
 て生活に困る〜では無いが、併しお香津  
 さんの責任と云ふものは、決して云ふべき無い。  
 女優〜その収入は僅少では無いけれど、  
 兎学の張る家業がけは、又それだけの退路  
 も有つて、中も福祉と云ふ譯には行かぬので  
 ある。従つて、姉一人、妹二人、  
 同様に 縁を飾るやうとするは行かぬ  
 い。と云つて、自分一人、善い行を修め、好  
 心持はし、ちよいといふやうな、其方へは其の冷は

□ おく〜の迫り（連）鳴き音を流す  
 れ音が無い。その為、不平〜の表情も  
 見せれ音が無い。他の動物も向して反抗  
 れ音が無い。大概ふきは眠り思ひで居る。  
 □ 虫所が能く香津さん下似て居る。矢は香  
 津子。の表徴と見て高当である。  
 □ え付 大森の海苔問答の神である。  
 家業は不向の兄の代は成る都合で  
 今では芝の櫻川町は 母親と姉一人妹二人  
 弟二人  
 女中二人、車夫一人と云ふ古き家筋で

さあ、中へは甚だしく人身攻撃さへ  
 加へるゝを居る。  
 □ 旧式の言葉ではあるが、  
 弱いゆゑ、  
 何のよけも引張りし  
 りて、新聞の埋まるるを居る。  
 □ 強さの優るとあるは、  
 艶聞さへ出して居る。流石を、  
 随分酷い人身攻撃が掲載されて居る。  
 中へは、  
 無間の傳へられて居る。噴飯も優せ  
 るの、二號標題を出されて居る。

責任

である。冷い強て、  
 □ 他のも優のぬく温行を居ると、三越日本は  
 莫大の金を拂ふといふ様ふ事は、法として仕立  
 ので、時の場所を自ら立つ様ふ一向問題は  
 起つて居る。わけをわけ、  
 心ふのを、既に、  
 問、  
 □ それと同時に、又、  
 雑誌の艶聞を出されて、  
 の、某紳士と好むの、  
 謝、  
 責任

白  
つ  
3

○<sup>1</sup> して自分は然<sup>1</sup>感<sup>1</sup>も、時<sup>1</sup>は取<sup>1</sup>消<sup>1</sup>文  
を書いて上げ様<sup>1</sup>も言<sup>1</sup>つた事<sup>1</sup>もあ<sup>1</sup>ら<sup>1</sup>な<sup>1</sup>が  
~~何れも思<sup>1</sup>入<sup>1</sup>て居<sup>1</sup>て、~~  
音を少し<sup>1</sup>流<sup>1</sup>しては<sup>1</sup>い<sup>1</sup>。自分<sup>1</sup>を<sup>1</sup>正<sup>1</sup>し<sup>1</sup>け<sup>1</sup>れ  
ば宜<sup>1</sup>し<sup>1</sup>い。疾<sup>1</sup>く<sup>1</sup>外<sup>1</sup>に<sup>1</sup>思<sup>1</sup>い<sup>1</sup>の<sup>1</sup>を<sup>1</sup>す<sup>1</sup>の<sup>1</sup>と  
遠<sup>1</sup>く<sup>1</sup>程<sup>1</sup>其<sup>1</sup>心<sup>1</sup>を<sup>1</sup>書<sup>1</sup>け<sup>1</sup>る<sup>1</sup>一<sup>1</sup>心<sup>1</sup>は  
唯<sup>1</sup>藝<sup>1</sup>術<sup>1</sup>は<sup>1</sup>身<sup>1</sup>を<sup>1</sup>捧<sup>1</sup>げ<sup>1</sup>て<sup>1</sup>居<sup>1</sup>る。  
金<sup>1</sup>も<sup>1</sup>其<sup>1</sup>所<sup>1</sup>も<sup>1</sup>若<sup>1</sup>く<sup>1</sup>痛<sup>1</sup>を<sup>1</sup>訴<sup>1</sup>へ<sup>1</sup>ぬ<sup>1</sup>鬼<sup>1</sup>の<sup>1</sup>態<sup>1</sup>  
態<sup>1</sup>を<sup>1</sup>似<sup>1</sup>て<sup>1</sup>居<sup>1</sup>る<sup>1</sup>の<sup>1</sup>を<sup>1</sup>あ<sup>1</sup>る。  
○ 小<sup>1</sup>部<sup>1</sup>を<sup>1</sup>せ<sup>1</sup>り<sup>1</sup>け<sup>1</sup>る<sup>1</sup>は<sup>1</sup>先<sup>1</sup>生<sup>1</sup>の<sup>1</sup>傷<sup>1</sup>を

□ 書く人は痛くも痒くも思<sup>1</sup>い<sup>1</sup>な<sup>1</sup>が  
帯<sup>1</sup>の<sup>1</sup>当<sup>1</sup>人<sup>1</sup>の<sup>1</sup>所<sup>1</sup>の<sup>1</sup>位<sup>1</sup>口<sup>1</sup>惜<sup>1</sup>の<sup>1</sup>事<sup>1</sup>  
心<sup>1</sup>を<sup>1</sup>女<sup>1</sup>優<sup>1</sup>を<sup>1</sup>思<sup>1</sup>い<sup>1</sup>居<sup>1</sup>る<sup>1</sup>事<sup>1</sup>  
良<sup>1</sup>家<sup>1</sup>の<sup>1</sup>妻<sup>1</sup>と<sup>1</sup>は<sup>1</sup>耐<sup>1</sup>え<sup>1</sup>難<sup>1</sup>き<sup>1</sup>侮<sup>1</sup>辱<sup>1</sup>を<sup>1</sup>  
受<sup>1</sup>け<sup>1</sup>れ<sup>1</sup>得<sup>1</sup>る<sup>1</sup>事<sup>1</sup>と<sup>1</sup>思<sup>1</sup>い<sup>1</sup>居<sup>1</sup>る<sup>1</sup>事<sup>1</sup>  
し<sup>1</sup>て<sup>1</sup>あ<sup>1</sup>る<sup>1</sup>事<sup>1</sup>と<sup>1</sup>思<sup>1</sup>い<sup>1</sup>居<sup>1</sup>る<sup>1</sup>事<sup>1</sup>  
刺<sup>1</sup>殺<sup>1</sup>を<sup>1</sup>書<sup>1</sup>く<sup>1</sup>の<sup>1</sup>好<sup>1</sup>む<sup>1</sup>事<sup>1</sup>  
女<sup>1</sup>優<sup>1</sup>の<sup>1</sup>肉<sup>1</sup>幕<sup>1</sup>を<sup>1</sup>知<sup>1</sup>り<sup>1</sup>一<sup>1</sup>方<sup>1</sup>  
記者<sup>1</sup>の<sup>1</sup>素<sup>1</sup>面<sup>1</sup>を<sup>1</sup>知<sup>1</sup>る<sup>1</sup>者<sup>1</sup>は<sup>1</sup>今<sup>1</sup>く<sup>1</sup>然<sup>1</sup>る<sup>1</sup>思<sup>1</sup>い<sup>1</sup>  
事<sup>1</sup>が<sup>1</sup>度<sup>1</sup>と<sup>1</sup>あ<sup>1</sup>る。  
□ お<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>津<sup>1</sup>の<sup>1</sup>人<sup>1</sup>の<sup>1</sup>變<sup>1</sup>態<sup>1</sup>を<sup>1</sup>あ<sup>1</sup>ら<sup>1</sup>わ<sup>1</sup>せ<sup>1</sup>る<sup>1</sup>時<sup>1</sup>は<sup>1</sup>あ<sup>1</sup>ら<sup>1</sup>わ<sup>1</sup>せ<sup>1</sup>る



詞も頂きませう。餘り多くは  
 如く〜  
 持つておられ時、お香津さんの言を  
 あつれ。

□ 当人は ~~何の事か~~ 一云つれの事  
 か、け方は他の意味を得意に、全く浦  
 には子供が多〜。阿ふさん、張くあつて  
 阿ふさん一人では、如何〜  
 か、おつて〜不詳だ。  
 □ それは既に、お香津さんが、後者人ふの事

阿母さんか、特別、お香津さん  
 く〜と上げないの〜、お分、子供が、  
 下は、然〜、根氣が、〜、  
 世所は有る〜。  
 □ ちよ、お香津さん、限〜は、他の女優の  
 如く、お中、お〜、千ヤオヤ〜、  
 合、  
 □ ~~お彼~~、勤めて帰〜、お家中で取  
 圍んで、煽ぎ立て、今日の人氣を、如何、  
 そんな細子の愛、〜、  
 親の目、〜、  
 唯の娘、〜、

~~~~~~~~~

□ 家の先... 眠く言つては 同様に... 居る。  
お香... 家へ行つて見ると... 本鏡... 氣  
の毒... 子供... 驚いて居る中... で、  
何ん... お香... 道... 時... は、有合せ... 我  
情... 茶... 掻... せん... せん  
を... 境... まで... 行つて... あれで... 政... 演  
れん... は... 思... せん... せん

□ 自分... 訪問... 香... 羽... 鏡... 平... 鏡...  
自分... 訪問... 香... 羽... 鏡... 平... 鏡...  
自分... 訪問... 香... 羽... 鏡... 平... 鏡...

引掛... 百次... 其時... せん... せん

つく... せん

を一目... 艶... 間... せん... せん

~~~~~~~~~ せん... せん

□ 物... 倉山... 者... 女... 優... と... 且... 又  
兔... 飼... せん... せん... せん... せん

あ... せん

□ 幼... 幼... 持... 怯... 取... 流... 儀... の... 男... 女  
優... 政... 急... 先... 鉾... 有... せん... せん

可... 愛... 居... 居る... せん... せん... せん... せん  
い... 小... 居... 居る... せん... せん... せん... せん  
所... 謂... 居... 居る... せん... せん... せん... せん

百々  
千々  
三々

ぶのち〜が、それらは不思議な関係  
あり、又一ツは、お香津さんの少しもハイカラ  
氣の通へぬが、~~自分の趣味と適合して~~  
 □ 半分は藝 ~~半分は~~ 西洋の音楽の  
お嬢さん ~~を脱して~~ 西洋の音楽の  
まじり、日本 ~~を脱して~~ 西洋の音楽の  
甘んじぬが、一方は藝術の熱中して、他  
を少しも顧みぬが、~~熱中して~~ 他  
何かは ~~熱中して~~ 他  
 □ 不思議な関係と、~~他で~~ 自分の方を  
 (お嬢さん、お香津さん)

向心は立派な娘

る位んで、小芝居の藝者を取つて居る時、  
お香津さんは女性の一人であり、  
 □ それがお香津さんの踊りの師匠と、自分の老妻  
とは懇意なものであり、又お香津さんの阿母  
さんとも親しくあり、  
 □ それがお香津さんの後、~~お香津さんの~~ 於て、自分の脚本を偶然  
るが、お香津さんが女主人として、  
 成つたのを、~~お香津さんが~~ 女主人として、  
 □ 幸ひして、~~お香津さんが~~ 大層の  
 (史劇) ~~お香津さんの~~



あ問は成つては、意氣の問題の成立すや

白ヌキ

先てえ奴は怪しめる者

ねえ先を [scribble] ですよと指指

とせがな代本野は話し掛けた。何時の間

く又も茶の間へ来てゐる。

君はあんまり物を見るのが好きだねえと

自分は笑ひながら言つた。

えへこい、おれは好きで見るだけ

に合ふものもある。

□ しづ斯ういふまじい、於て、白は香津と

[scribble] 交際

[scribble] 又其、託されぬ矢を

[scribble] 抱く奴は安全。

[scribble] 可憐なものが、居る。矢を

[scribble] 其氏と其よとの口を

[scribble] 批判は、

□ いや、老人の眼より、世の事は、さういふ

無念人が、我を父の如く慕つて居るのよ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

無念秋が、主人を室の奥へ、見えぬ

何んぞ君は  
泣進すんぢや。  
89

うめんが……と代本野は頭を抱へる様  
し……世手を後の肩へ落し……又膝へ坐  
しれ。

丸うまのこやのどめは穴が掘れ……

君の池が滑溜……

君は何の用であつて……

田丸さん……聴くた……です……様子

見……あ……ん……

で……直……お……お……さ……ん……の……紙……へ……報……告……を……行……く……ん

え……さ……ア……

借……の……欠……を……處……持……て……居……る……あ……ん……て……

い……つ……の……報……告……

君は……う……ま……イ……ヤ……ゴ……ー……を……伴……内……に……直……して……

海……下……る……の……困……る……女……優……連……の……悪……に……な……つ……て……大……分……悪……古……を……認……は……せ……る……の……を……評……判……が……好……く……

無いせし

言んふ事は有りませぬ

君の傍に身を置き候はるる事

いと悪くも言ふて候はるる事

併し借は君の人格を尊ぶる事

心も身も一つに信じて候はる事

言はんは困りませぬ

併し君は善く候はる事

悪く候はる事

言はんは困りませぬ

可憐がらむに居るんぢやね

如何に徳が有る事

菓子あんかはどんちきやうめり居るの知れ

あしき

言はんは本筋です

直ぐ無事に候はる事

いゝえぢやせん先生

言はんは有るん

下す事由上げませぬ

お茶室は如何

か何方で願ひませぬ

人氣御者

91

ですか。と言はし。れ。  
 借下向つて出鱈目は止し給へよと  
 自分には比る線と言つれ。  
 それが興古で無いんぞ  
 がやア又蓬萊客の一件のい。あれは  
 徳也よ。当人へまくの周協は、幸断れとい  
 ふ事だぞ  
 がやア先を、全く今度の一件を皆  
 無し  
 今度の一件？ 知らぬわ  
 2

又文士劇の催しがやアあつか。好い  
 加減止し給へよ。今、其、鴨、う、正、小、屋、が  
 知れぬわ  
 いえ、そんなものは有りません、古橋を  
 あんです  
 ます、先下甲茶は入らぬわ  
 2

七、白又平

番  
 日、晩茶の、抱、れ、の、を、吞、み、あ、が、り、代、本、野、は、  
 ぬえ、先、生、も、お、香、津、さん、の、艶、聞、を、片、下、  
 2

91



96

日 だかゝる先生は甘えん坊です  
 日 どうもえんは何時も厳し  
 日 私も金く怒りいれのです  
 日 如何せんおのれは  
 日 私は岡坂先生を聴くべし  
 日 ふむー岡坂君か……  
 日 お前、言えんお事を知つて……お香澤さん  
 日 〇〇さんの喜ぶ成つて……おせえです  
 日 えんお事は有りません。私は毎日の様  
 日 お言へる……お事。それ……私の友人

の目めも手紙てがみ入りに……  
 日 悔くの筆動は……  
 日 つれです。と先生を冷然と……  
 日 然し……と思つたが、け所下議録を  
 日 一と……それは他日自然と君  
 日 が了解するまで待つ……小倉、も古層層を  
 日 入れて……様わけ……能く……  
 日 して……好い……と、斯う……  
 日 や、それは大椿事……  
 日 先生と……者……

二人の目附後

曰 既に君はそれを知りて居るなり  
 曰 ア然しとす  
 曰 や、それは此れに思ふ事か。らん事  
 が有り得やき 此れが思ふ事  
 曰 と、御有る事かと思つて居る事か  
 曰 家坂の鸚鵡ははははは  
 曰 ですが、先生、本銃ですぞ  
 曰 だつて君、あの家の事情からあの人の  
 不断の行動、お、君事を除いた僕位  
 一く知つて居る者は無いんぞと

曰 然しとす  
 曰 下、家坂君は、弘道あつた家の  
~~事柄~~  
 曰 ~~知らぬ~~ 知らぬと云ふんぞ  
 曰 世に通つて  
 曰 世に知つて人の言ひ事を、証據を以て、  
 信じて、知つて居る僕が打消す。替成  
 しはつと云ふは、不合理だ  
 曰 世に知つて居る、疑の秘意をよま。町内で  
 知らぬは、真面目あり、でげす。先生が全  
 く甘えの、知れぬんぞ。いららららら

□代木野郎が去つてゐる。自分は書生。入つて、机に向つたが、益々事は動かし難く成つた。

□その譯である。考へは依おの上へは傾めたいで、香津子艶聞を件よの女泣いて居るのだから。

□又あの人は誤解されたのか。

□併し、今度ののは、目黒の口々で、一寸驚く。あの真面目な人が言ふのは、皆真実の無い事だ。無いのを知らぬ。

白子

□頭から氷の解けた水を打掛けたら、氷が溶けて来た。その水が既に石の隙間に溜まっていたけれど、流れて来たのを我儘で、溜まると言ふ。

□代木野郎の言は半信半疑。その言を唯、唯、唯、唯と言ふ。先入見と成つた。思ふ事。

□あゝ、それは譯は有りません。好く思はす。私が一筆、馬力を捕はる。取調べて見せようよ。聊か方でも説は傾いた。

□ の下に、世間は何の刺戟を興へる者もふかつ  
 れのよ、その時、自然の発達も遂げても、最早や  
 一人ある成るべきものである。誰か教へぬ事を  
 □ 如何と之は生理上の作用を有つて、到底  
 抑するべきものでは無いのである。  
 □ それを考へて見れば、お香津さんが出て、今は早や  
 小学校の生徒では無いのである。強小境  
 □ 孤獨的では無い。最も刺戟され易い位  
 置に立つて居るのである。或は……と心念  
 が、全精力で脳を抑壓し、

□ それであるが、内輪で少しづつ煙位  
 はよりさうさういふ。それが少しづつ無い。  
 □ 舌張例の奥である。  
 □ だが、今日も今日です。女の矢が。  
 □ ついに時間を自分の胸の上で舞つて、4シクを  
 し、居れば、既うを流し仕務を就いて居る。  
 それを餘所の者が、見えへ知つて、自分は今  
 際知らぬのでつれ。路に  
 □ 小さな、時、鳥針籠に入れ、  
 へ来て、二匹同時の成長して、今の入格つ

□ 厭ふ〜 何れも云へぬ不愉快  
起つて来れ。

□ おし、その事、あつたらぬ、併し〇〇氏の自由を成るる、最も、善い男子が有る、〜、慕念、〜、好不好、と云われ、い、何んば何んで、〇〇氏は醜い。□ 女、醜い、〇〇氏と、真、關係、有る、〜、い、如何、〜、此、性、問題、下、は、無。生活問題、で、  
□ と云つて、一、家、様、は、成つて、貞、操、を、賣、る、は、南、家、は、法、を、能、く、〜、

□ どの、念、考へても、有り得可らざる事。

□ それ、全く、お香津さんを知ると、昔の言を、お香津さん、能く知る、自分、〜、  
ふりは、  
□ だが、お香津君、と云ふ、  
〜、  
考へれば、又、心、酔、

□ その不愉快を感ずる程、  
考へれば考へる程、不愉快で成る程、  
不愉快で、  
〜、  
人。

他と通つれとぞいふらん此の時も感の  
煩悶も事々様である。 (此の時)  
何んぞか知るるが、一種不思議の力を以て

脳中の攪乱されておられ。

□ それに自分つれ。自分には子供に思ひ。

もし神の有つて、その神も志を思ひ

と知るる時、父とて感する。 (此の時)

苦痛、それが正しく之を感する。

□ 思ふこと、因時、既に自分付、そんな後、感する。

□ 心細くも覚える。

□ や、其後、感する。感する。 (此の時)

□ 力、それが事々様である。 (此の時)

系、感する。 (此の時)

分の子、感する。 (此の時)

事々様である。

□ 好い、然るに、その心を、

引はして、目を擧げ、打つて

打ちのめして、 (此の時)

感する。

□ いや、事々、感する。 (此の時)

感する。

□ 兎の少竜は当然に破れ壊してふ。その  
 二匹の兎の白毛を泥を以て敷きつて無理  
 子あの手紙の中へ押し込んで早速櫻川町  
 へ送り返して置く。

おの

□ それから又自分の責任として、あの人の為  
 には車中へ招いて人達の知へ一々謝罪  
 して、あけられぬ。品行方正、技藝  
 優秀、其為幹部を取りまわすのよき  
 是非、片見物を預けます。能くして  
~~間接に~~ 間接に加林

あけられぬ 相違

□ や直ぐの幸。成つて来るものだ。

# 白又や

□ 既に自分一人では若くは耐え切れなく  
 成つて来る。

□ 世所へ買物でも先妻が帰つて来る。

何ぞそんな事を考へ込んで居らうと  
 待構へて居るのだ。即ち今日代本野が来る





中橋姫が盛つ子

は、強欲である。それを知り多様な又向ふで  
と警戒する。其所が母であることへは、それまで  
だが、そんな複雑な性格の者が具備して居る  
お香津さんでは無い。舞台以外の芝居が、さん  
ある。お香津さんには無い。人では無い。

第一、ママ、あのお香津さんの平常な所見  
と、あれで二十歳を越えたと見えやうな。お  
作は、いえ、子供、子供、男の子です。氷川

の儲へ行つた時、あんの片断、あつた。姉と弟  
のあつた。一結、成つて、腕を打たせ、キヤツク  
と、後、お宮の後で、鬼ごっこを始めて、  
て、銀を返しの振を振いて、また、いそ  
いそ、色氣を隠して、子供、あつた。あつた。  
は、又、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
て、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
の、あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

父

(9) ねえさん

□ 能く知って云って呉れれと、自分が書い  
て居りながら、老妻の辯白も痛快に聴く  
得ぬ。

□ ねえさん、あの人が不断云つて居る  
では有りませぬか。  
せんか。老妻は健康におきず、澤山見て居  
ますか。そんな氣は皆と出せません。それ  
も女優に成りきりお蔭を、如何や。社会の  
道具裏も見えて来す。立ち流し成功  
するまでは……ツて、あれ程云つて居る

では有りませぬか

□ 知れぬ。叱られれば自分も困らぬ  
を得よ。

□ ねえさん、浦の阿さんの氣性が然  
うですよ。お香津さんよ、そんな事をさせ  
んでは。又假し旦那が出来る。おさ  
と浦家の内家。如何なるか。おさ  
姉と横白弟とが、取組み合の喧嘩。居  
る中で、お香津さん、事柄を、誘う。後  
ふ、おんを、康待は、出立。お香津さん

□海苔問答の大家甚を見ると今の借金を後に  
 の空際をさ。古家族の入るべき家ではさ。天す  
 の女優が居るべき家ではさ。

□いぢ既う能く分つれ。

自又  
 フニ  
 3

□此迄を終て考へざるを得ないのは、輕くく  
 人の噂をたぐる事である。

□新聞雑誌の読者及ぶども、最少し慎んで有  
 つて貰ひたい。今うきをよどの位誤解を發表

いぢと居るものさ。まいである。

□書く人々何んぞ無心。万年筆のインキが少し

減るだけの事だけれど、書かぬ人当人は成して

見れば、筆の減るに心を遣ふにけり。然

るを思ふ者、身は取つては、どの位悲しく口

惜しんであつた。大打撃をくらうので

ある。

□そのも、取浦子行き、み言訴する者は勇気者で

ある。弱い家業の女優のこゝろは、唯泣いて居る

よ。地へは無心と思へば、つい義憤を起す事

「は 居るれよへ。」

□ お香津さんの事件のりをは無い。他の女優の  
對しては多くはえであらう。種の出所も大概  
分つて居る。代本野神助センセイが、女優通と云  
のりよと、分つて居る。

□ 今度の事件は併し新聞にそのりをは無い。  
上野の目も坂君のりよを出れりか、それを  
如何も困るのをある。

□ 老妻のりよと説のりよ。自分も亦罷く分つて  
居りよが、一王拭子のりよといふ結構を其れ

見る事が出来た。得

□ 馬鹿と云ふ。何んぞ。そんな話をする事

で、大事件のりよを、如何にもいふがと、幾  
分の掃消さうと云ふ、それが出来た。

□ 世所で、居坂氏は手紙を出して、  
早くして氏の言ふ事や、それには掃所

の有りや、腹筋よく其消息を汲らうと  
其の事や依頼してやつれ。

□ 未だ其返事、の来を問は、  
入ありつれ。其の親類を、居坂氏が

高橋用子  
お香津さんの三枚を、其の感に於て  
居坂氏の

年此より早くして、甘序では、虎の新しい居る  
見よ来たりのを

□少し早く見れかつね  
入つたのを、そのを、  
の、の、の、の、の、の、  
を、の、の、の、の、の、の、

□待機時の相解  
を、の、の、の、の、の、の、

□小虎の二匹の虎を、  
を、の、の、の、の、の、の、

を、の、の、の、の、の、の、  
を、の、の、の、の、の、の、

くさ  
うね。

□自分が居るとは知るか、  
お香津さんは、尻の

附くのも、二匹の虎を、  
せて、膝の上を、置き、あが

□お虎は、幸ひ、  
家を再興して、内、先、

□之を聴いて、自分は、  
聴くより、今の一言で、

□尾坊の、どん、  
を、の、の、の、の、の、の、

護る必用か思ふと困るれ。

□ 然るもけ 女優を疑ふ者よ、兎のやが

言

を聴りて

是非 隠して

思ひて

フリン6

「をばり」

よ

75



